小川徹氏が残してくれた桑水流集落の写真
The photos of KUWAZURU village left by Toru OGAWA

アーカイブ委員会：河村明植、金澤雄記、上田忠司、古川修文
Archival committee
M,KAWAMURA, Y.KANAZAWA, C.UEDA, N.FURUKAWA

はじめに

本学会の先人たちは日本各地の民家、集落などを調査し、多くの写真と資料を残してくれた。その中には今は失われた貴重なものが発見される。アーカイブ委員会はそれらを整理、分析して公開し、広く社会的貢献に供することを目的とした活動をしている。

本稿は学会草創期からの会員で理事（1984～1988）及び評議員（1976～1978）などを通して学会の発展に活躍した故小川徹氏の残した写真を取り上げる。

小川徹氏（1914～2001）は岡山県出身の地理学者で、法政大学教授、駒澤大学教授を歴任していた頃、特に戦後の復興が一段落して都市、農村の変貌の激しかった昭和 30 年～40 年代、日本各地の農村の実態を調査し、記録に収めていった。研究対象は多岐にわたるもので、そのとき膨大な写真を撮影して研究に活用したのである。晩年になって身辺整理の折 44 本のネガフィルムが見つかり、それを学会に寄贈してくれた。ネガの種類はカラーとモノクロがあり、サイズは 35 ミリの他に当時はやっていたハーフサイズと呼ばれる 35 ミリの半分のサイズや、スライドポジフィルム、六六判と呼ばれる 2 眼レフカメラのフィルムも混ざっていて、多種多様であった。しかしどれも 60 年以上経ったネガフィルムであり、変形したりカビが生えたりして損傷が激しかった。微熱を加えて変形を直したり、蒸留水を含めたガーゼでそっと拭いたりして変形を直したが、途中で割れたりしたものもあった。それでも一時の間変形が治った瞬間を見計らってネガをデジタル化装置で陽画（ポジ）に変換した。これによって約 1600 枚の貴重な写真を得ることが出来たが、鉛筆ほどの太さに丸まって元に戻らないネガやフィルムの表面の幕が損傷してしまったものなど 5～6 本あって廃棄せざるを得なかった。今後の課題はデジタル化に成功した写真を精査し、今後の学会の活動にいかに役立てていくか、アーカイブ委員会はどのような方法で発信していくか検討してゆく予定である。

1.　鹿児島県桑水流集落の民家

本稿は小川（以下敬称略）が 1959 年（ｓ34）12 月に旧鹿児島県薩摩郡川辺町（現鹿児島県南九州市川辺町）の桑水流（くわずる）および冷水木場（ひやみずきば）上組の集落・民家を悉皆調査し、家屋の形式と建築年代を調査したものである。桑水流は川辺町の小字の集落であるが、冷水木場上組の詳細は分からない。当時、小川は 45 歳くらい、法政大学の地理学の教授で、学生とともに 10 日くらい合宿して調査した。小川は後日この結果を「民家形式の分布図」という一連のテーマで学会に発表したようであるが、そのときの発表につかったスライド仕上げのフィルム 19 枚が残っていた。ここではこのフィルムをもとにして、報告するものである。

桑水流は珍しい名前であるが薩摩藩時代に門割（かどわり）制度という農民支配によってつくられた村落の基本単位（門）のひとつである。強い繋がりで守られた共同体であった。調査当時、

桑水流には 43 軒の民家があった。基本形は小川が「三つ並び」と呼ぶ茅葺き三連家屋（オモテ、ナカエ、ウマヤ）で、最も多く残っている。明治以降にオモテとナカエがつながって一つ家になりウマヤと並んだ「ナカエ造」（小川）が増えている。昭和初期に入って瓦葺家屋が出現したが、これは全てがナカエ造でそれに茅葺きのウマヤが並んだもの、さらに昭和も戦後になってウマヤも瓦葺きの家屋に取り込んだものも現れている。小川はこれらの民家形式と変遷を表にまとめたスライドを残している。その表は 43 軒の民家に番号を付け、型式と変遷（時代）に対応した欄に振り分けているから、一つの番号の家が何か所かに見える。これは各家がいつの時代にどのように改築したかを示す価値の高いものであるが、残念なことにフィルムはセピア色に変色し、損傷が激しく、タイプライターで打った数字が崩れていて、判読できないものが半数以上あった。表には全部で 92 軒の数字が載っているが、判読できたのは 24 個だけである。そこで各家に振られた番号には関係なく型式と時代の欄に対応した家屋数だけを記入した新たな表を作成した。これが表 1 であり、小川の作った表でないことを明記しておく。

民家形式はオモテ、ナカエ、ウマヤから成る分棟型が基本である。オモテは客間・座敷のある建物であり、ナカエは生活の間で、ウマヤは厩、物置などの建物である。小川はこれらを 3 型式に分類した。

(1) 三つ並び。ウマヤ、ナカエ、オモテの 3 棟が独立。記号：（ウ）（ナ）（オ）。まるカッコ（　）は茅葺、隅付きカッコ【　】は瓦葺を表す。

(2) ナカエ造。ナカエとオモテが 1 棟に結合した形。記号：（ウ）（ナオ）。茅葺でオモテとナカエが一ツ屋になり、ウマヤが並ぶ。

(3) ナカエ造。オモテとナカエの一ツ屋でウマヤがない。記号：（ナオ）

(4) 【ナオ】：瓦葺のナカエ造、それに茅葺の（ウ）が付く。記号：（ウ）【ナオ】。昭和前期に出現した。

(5) 【ウ】と【ナオ】は戦前、戦後に出現している。

(6) 【ウナオ】は戦後に出現した。

(7) 瓦葺の三つ並びは存在しない。

屋根はオモテが平入で、ナカエが妻入り、ウマヤが平入になっている。オモテの東側に仏壇と床の間を置くのが多い。床の間の奥行きは 1 尺以下であり、これは古い形である。柱間は芯々6.3 尺、ウマヤは 7.0 尺が普通である。軒先はセガイ造になっている。屋根の傾斜は矩勾配より強い「返し 2 寸勾配」である。

集落は南斜面にあるから、多くの家屋は南に面して横一列に並ぶが、大多数は東からオモテ、ナカエ、ウマヤという順である。しかし僅かではあるが道の関係で西にオモテを置く家も見られる。

2. アーカイブ委員会の提案

アーカイブ委員会は、学会の将来を担う学生会員に研究資料の提供などで援助することを事業の一つとしている。

例えば桑水流集落の写真を見て

(1) 写真から何を読み取れるのか、何処まで深読みできるか。（洞察力）

(2) 写真の集落・民家が今はどう変わっているのか、行って実際に見てみたい。（追究心）

(3) 集落・民家の変容の中に、住生活がどのように変わっているか、あるいは残されているか。（過去と現在のつながり）

(4) 例えば間取りは個室型に変わっていないか。（間取りの変化、広間型の消失）

(5) 集落全体の生業や習慣、伝統行事などは継承

されているか。変わってしまったか。それに対して住民はどう考えているか。

など、昔の写真の中には、現代の視点から見ても追究すべき多くのテーマが存在する。深くみつめることで、新鮮な関心や興味がわき、研究の意欲に結びつく。民俗建築アーカイブは先人の残してくれた多くの資料を紹介し、研究に活用していただくことを一つの目的として活動している。

写真 3　左から（ナオ）（ウ）のナカエ造

写真 1　桑水流集落の風景 1959 年 12 月撮影

写真 4　左から（ウ）（ナ）（オ）の三つ並び

写真 2　冷水木場集落の風景 1959 年 12 月撮影.

写真 5　左から（ナオ）（ウ）のナカエ造

写真６　（ウ）（ナオ）のナカエ造

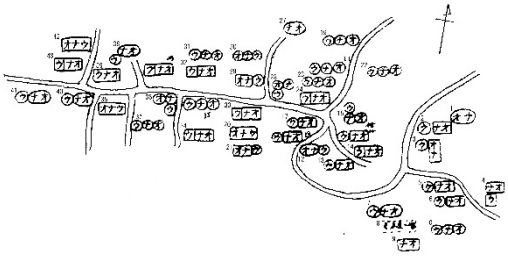

図１　桑水流民家民家型式配置図

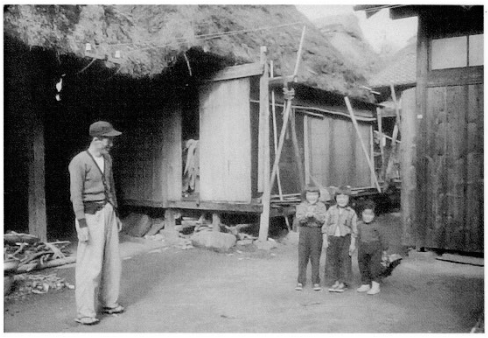

写真７　女の子３人の記念撮影と父親

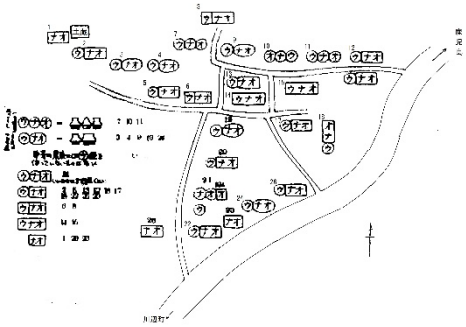

図２　冷水木場民家型式配置図

写真８　瓦葺きの（ナオ）（ウ）、ウマヤは二階造

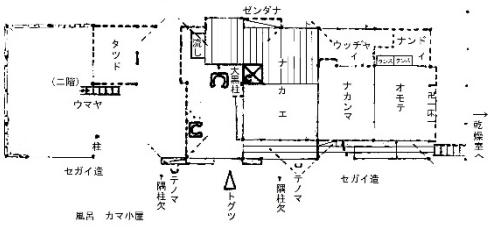

図３　櫨木氏宅間取

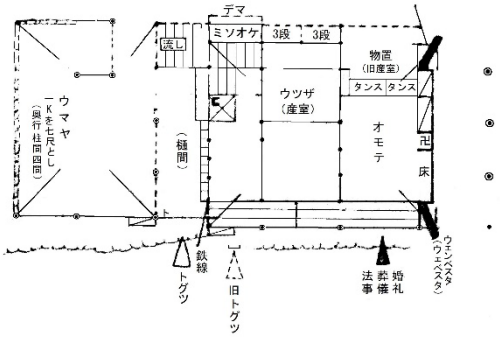

図４　山下氏宅間取

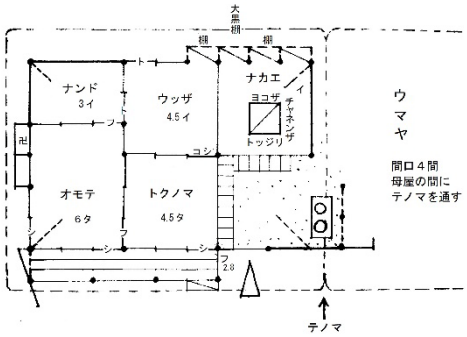

図７　住吉氏宅間取

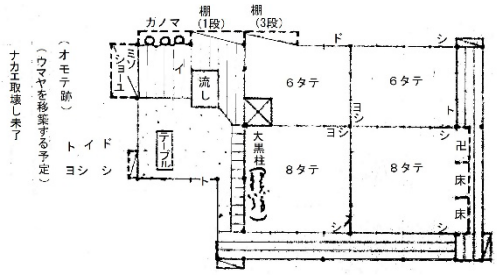

図５　上田氏宅間取

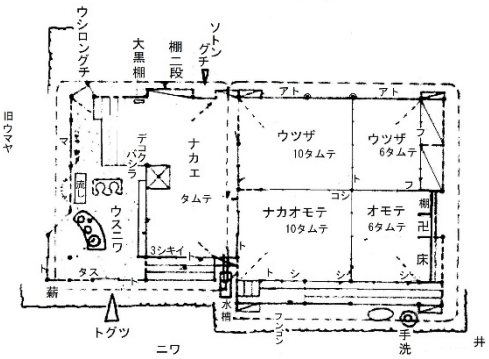

図６　重信氏宅間取

表1　鹿児島県薩摩郡川辺町桑水流の民家型式構成とその変遷

型式		時代	不明	明治	大正	昭和(1)	昭和(2)
茅葺	三つ並び	(ウ)(ナ)(オ)	1 3 5 6 7 10 15 21 29 30 31 36 37 39 42	7	8	7	12
茅葺	ナカエ造	(ウ)(ナオ)	7 25 41	21 43	21 40	3	7 12 38 40 41
茅葺	ナカエ造	(ナオ)	27				1
瓦葺	三つ並び	(ウ)(ナ)【オ】					
瓦葺	三つ並び	(ウ)【ナ】【オ】					
瓦葺	ナカエ造	(ウ)【ナオ】				2	10
瓦葺	ナカエ造	【ウ】【ナオ】	34			2	8
瓦葺	ナカエ造	【ウナオ】	20				4
瓦葺	ナカエ造	【ナオ】				1	1 9

注：数字は軒数。増改築を含めた軒数のため重複した数字である。例えば【ウナオ】の欄は不明1であるが、同じ家が昭和2で改築したため4軒の中にも含まれている